

まざる、まぜる、まじわる、

幼稚園の四月

豊田 一秀

子どもは、混ざることが嫌いだ。幼稚園の四月、

見ず知らずの人の中に入れられ、集団として扱われ、同じように行動することを求められ、仲良くすることを望まれ、また、それを他人に評価される。

人に対して攻撃的になったり、人の指示を無視したり、感情を外に出さないようにしたり、あるいは逆に、人形のように言いなりになってしまうのも、混ざることから自らを守ろうとする様々な態度だと

言ってもよいだろう。

人間の自我は本質的に混ざることが好まない一面をもっているように私には思える。以前に私が受けた持った子どもの一人は、一学期の前半だったと思うが「私は幼稚園に行く」と解けちゃいそうな気持ちになるの」と生気なく訴えた。と母親から聞き、その言葉がドキッと強く私の心に残った。また、非常に個性的な男の子であったが、やはり誕生会の時に、皆

と一緒に遊戯室に行くのを嫌がり「そんなことしたら混ざっちゃうじゃないか」と私に訴えた子どもがいた。どちらも混ざれることを拒絶しようとする孤独な、しかし健全な子どもの魂の発露であつたと思う。

「混ざる」ことの嫌いな子どもも、「混ざる」こととなるとその様相を一変させる。砂場、雨上がりの地面、子どもはゆったりと地面に座り込んで混ざれることを楽しんでゐる。時には、楽しむというより取りつかれていると言つたほうが良いような真剣な表情をしていることもある。

私は混ぜるといふことが、人間の行為の中で本質的なものの一つであるような気がしてならない。料理もその多くは混ぜることである。混ぜることによつて自分の善しとするものを創造する。食べることと自体も口の中で食べ物を混ぜることだと言えよう。人は噛むことによつて食べ物を混ぜ、自身の中に取り入れる。呑み込むには口で混ぜる必要がある

のだ。

「自分で混ぜたものは自分の内なるものになる」と考えると、幼稚園で様々なことを考える時の良いヒントになるような気がする。子どもは片付けが苦手だ。遊び始めた時にはものすごいエネルギーでおもちゃを出すのに、片付けとなるととたんに力が萎えてしまう。片付けが遊びとは違って創造的でないこと、次の遊びにすぐに移りたい子どもの気持ち等を考えると、このことも一応の合点がいく。しかし、人間の行為や思いを原初的に現してくれる三歳児の行いを見ると、今述べたことだけでは説明し切れない何かがあるようだ。例えば、遊び始めるときにも、籠に入ったレゴや積木をまず総て床にざーっと空けてからそれを使い始めるといふようなことを子どもはよくする。大人はつい、使う分だけ籠から出せばいいのになどとケチくさいことを思つてしまう。おままごとコーナーもまた然り。子どもが遊び出しやすいようにと、ままごとテーブルの上

写真1

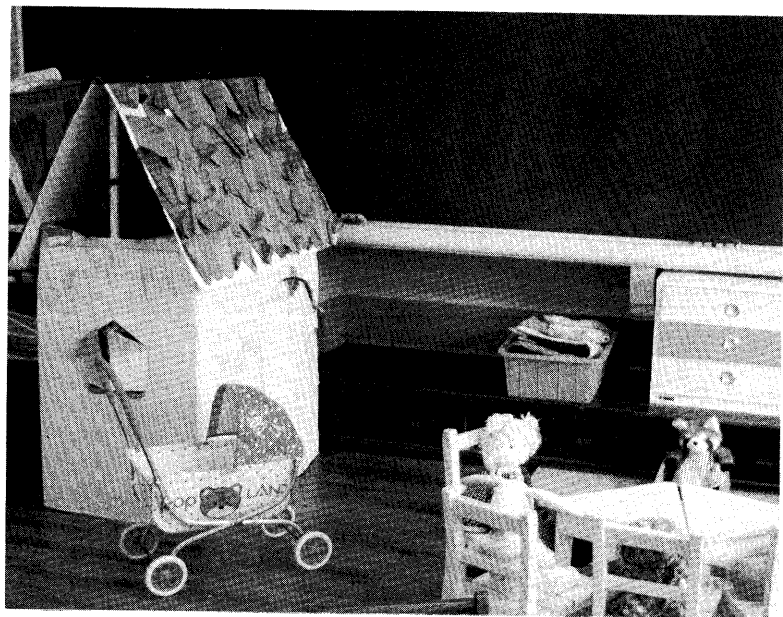
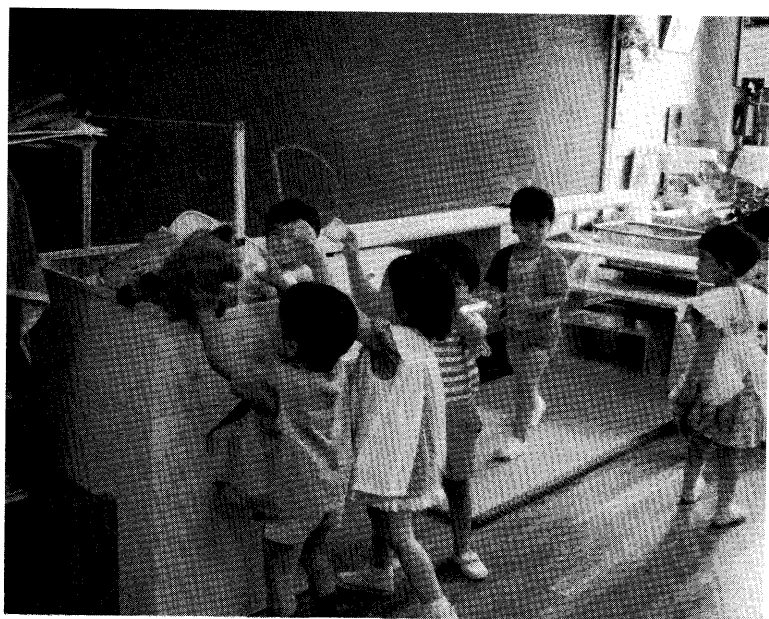


写真2



にきれいに食事の用意を並べておいたりすると、子どもは一気にそれらを乳母車や箱の中に放り込んで遊び始めたりする（もちろんこれはこれで、遊び出しやすいようにという私の意図は達せられたと思うべきなのであろうが）。私のクラスには、二、三人の子どもが入れるようなダンボールで作った家があるのだが（写真1）、ある時、しばらく園庭に行って戻ってみると写真2、のような在り様であった。子ども達はあるとあらゆる部屋中のおもちゃをその家に詰め込んでいるのだ。子ども達があまじ嬉々としてしているので、私はしばし言葉を失ってしまった。第一、その時の彼等はどのような言葉を以ってしても、その楽しみを中断してくれるような状態ではなかった。

子ども達は混ぜているのだ。部屋中のおもちゃを混ぜているのだ。そして、自分たちの気に入っている家に食べさせているのだ。そして、片付けるのはまたしても私である。アアア……。

ひどく不適切な比喻だとは思いますが、いつだったか動物園の飼育係の人がカバの話をしていたのを思い出す。カバは水が好きなので、きれいな水がよからうと水を替えてやると、すぐにカバはその中にフンをしてしまうという。おやおやとプールの水を替えてやると、またすぐにしてしまう。しまいにイライラしながらも替え続けているうちに、ある時、カバはきれいな水より自分のフンで汚れた水のほうが好きなのではないかと気付いたという。動物に見られる一連の匂い付け行動の一種なのだろうが、飼育係にそこまで気付かせたカバの努力もなかなかのものであると、一人感心しながらも面白い話だと思った。カバが気持ち良いと思う状態と、飼育係が気持ち良い状態とは違うのだ。カバと人との価値観の相違とでもいったら良いのだろうか。

整った部屋はどうも子ども達の心持ちにそぐわないらしい。だからといって最初から散らかしておけば良いというものでも、もちろんない。少し誇張し

て言うなら、子どもは自分の手で世界を変化させてみたいのだ。思い通りに身近な世界が変化するのを感じて、逆に自分の意思といったものの存在を確かめているのかもしれない。

そうだとするならば、散乱した部屋は子どもの作品と言えるかもしれない。しかし大人はこの作品を、多くの場合好まないのが家庭でも幼稚園でもいさかいが絶えない。

さて、色々なものを混ぜ、自分の作品を創りながら、子ども達は友達や保育者と交わりを持てるようになってくる。与えられた環境を子どもが自分で色付けすることで、いやそれ以前に、自分で色付けしてもよいと思えることで、子どもは自分を発揮し始める。

子どもが幼稚園という一つ場で、様々な人や場で交わるようになるには「関わっても混ざらない」自分を持つことが必要なのだ。

ただ、保育者は自分が個々の子ども達に色付けさ

れるのを楽しみ、許容しながらも、色付けの仕方、ひとり一人の子どもの様々の仕方ですすことは必要であらう。

混ざることの嫌いだった子ども達も、あるがままの自分の力で生活することが出来るようになってくると、混ざることまた、楽しめるようになってくる。ある時、一人の子どもが洗濯機になっていくので、両腕の中にその子を入れて洗って(?)いると、僕も私もと、一斉に子ども達が両腕の洗濯機の中に入ってきた。大勢の子ども達は私の両腕の中で芋洗いのようになりながら、友と混ざることを楽しんだ。混ざっていても自分が解けてしまうことはいと確信を持っていたからだと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)